気仙・アートとライフを
ここに持ち寄る

*RIKUZENTAKATA ARTIST IN RESIDENCE PROGRAM 2019*

# KESEN ART & LIFE POTLUCK SHARING

Artist 01

# Mkrtich Tonoyan

# ミクルティチ・トノヤン

## 生まれ変わるアーティスト・イン・レジデンス

ミクルティチ・トノヤン／ ヴィジュアルアーティスト［アルメニア］

これまでの日本への旅は、私の人生を変わるような経験となってきた。日本への初めての滞在は2014年で、レジデンスのアーティストとして、リサーチを行うために遊工房アートスペースから招待された。1ヶ月間の東京でのレジデンシーのあいだには、気のいい人々や素晴らしい日本のアーティストたち、芸術の専門家たちに会う機会、いくつか日本のマイクロレジデンシーを訪れる機会を持てた。女子美術大学を訪れ、日沼禎子氏と出会い、そして陸前高田を訪れた。その時に、岩手の被災地におけるマイクロレジデンスプログラムについて学び、その町は陸前高田市と呼ばれ、事実、街自体は津波の後のため存在しておらず、いまだ再建と復旧の経過の途中であった。そのプログラムはどのように組み立てられ、どのような方法で彼らが、トラウマ後の癒しのための社会的ツールとしてアートを利用するのか、私は彼らのレジデンスプログラムを学ぶための陸前高田への遠征へと加わった。これは、1988年のひどい地震によって壊滅した町、被災地であるアルメニアのギュムリ市でアートイベントを企画した経験のある私にとって、とても興味のある主題だった。私も、彼らの目的と似ており、どのようにトラウマ的経験を受けた場所においてアートが運用されるのかという探求を目的として、ギュムリで国際的なアートイベントとレジデンシーを組織してきた。

その訪問の以来、陸前高田について考えることを止めることができなかった。この傷ついた町を見たこと、それについて感じたこと、その経験が私を深く揺り動かし、そしてアートが癒しのその過程のなかで大きな力になりえることを信じ続けさせる。2019年には1ヶ月間、日本人アーティスト小牟田悠介と一緒に日本のスタイルの家で共同生活しながら、完全に資金提供されたリサーチレジデンシーに招待されるとても幸運な機会を得た。陸前高田で幾人かの人々は既に知っていたし、それによって生産的な活動ができうるだろうと自信があった。今回は阿部史恵に出会い、彼女が日々のレジデンシーを管理し、移動の手助けや、岩手の他の町々の案内、通訳やすべての日々の要求を手助けしてくれた。

私にとってそれらは素晴らしい文化的交流だった。岩手の風景、伝統的な日本の食事そして料理することの創造性、特に「海苔」と海苔と使うことができるあらゆる素材から作品制作の着想を得た。私は海苔をアートのメディウムとして着目した。私のインスタレーションでは、それを使うのみならず、折り紙と日本の視覚芸術、特に木版の上への透明水彩と、筆記の漢字というシステムへの挑戦を行なった。これらの事柄へのリサーチは、洞窟の描画や彫り物を通じて情報を他者や次世代へと伝える、現在では「ペトログリフ」として知られているが、人々が出来事や物語を伝えるために記録することを考え始めた、過去のアルメニアの時間へと私の気持ちを引き寄せさせた。そして私の国と、小アジア、それら日本で見つけたペトログリフの間に類似点を見つけて驚かされた。もし太古のアルメニア人が日本へと旅し、岩の上に記されたそれらの物語を見たとき、日本語の理解がなくともその意味を理解しただろう、またその逆もまた然りだろう、と想像した。しかし、今アルメニア人が初めて日本語の文字を見て、それを読み解くのは不可能であるし、日本人がアルメニアの文字を読むのもまた不可能である。

オープンスタジオの期間中、このレジデンシーの間に開始した2つの進行途中の作品を披露した。この世界の違った2つの箇所のペトログリフの類似点のスケッチ、私はそれをコンクリートで型抜きし、陸前高田の建設中のコミュニティセンターの床面へと組み込む提案へと発展した。また、ひとつの映像プロジェクトにも取り組んだが、それはその後に「Collection of Recollections」という名前の東京のグループショウへと送った「Roll Call」（点呼）というタイトルのドキュメンタリー映像となった。

陸前高田の私の時間のなかで集まった、たくさんの考慮すべきリサーチの材料とこの気持ち、それらはいくつか現在のプロジェクトを通じて消化していくだろう。私はいま、このレジデンシーでの人生を変えるような経験の記録と、「selfie」（自撮り）というコンセプトを探索しながら、陸前高田のレジデンシーについての映像での物語に取り組んでいる。

私の日本の心は、私を日本へと連れ戻すだろう、そして日本の友人を招き、彼らに我らのアルメニアのコミュニティを紹介することを通じて、母国のなかで小さな日本を私はつくっている。陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラムに幸運あれ、その傷を癒しながら、社会の発達と変化を導き、それは強く、人を動かすコンセプトを持っている。

# Art Residency of Reincarnation

Mkrtich Tonoyan／ Visual Artist［Armenia］

The first time I visited to Japan was in 2014 to undertake research as an artist in residence at the invitation of the Youkobo Art Space. During my one-month residency in Tokyo, I had chance to meet good people and wonderful Japanese artists, art professionals and visit several Microresidencies in Japan. I visited Joshibi University, met Teiko Hinuma and visited Rikuzen Takata… I learned at that time about a Microresidence program in a disaster area of Iwate, and a city called Rikuzen Takata, that in fact didn't exist during that time after the Tsunami and was still in the process of rebuild and recovery. I joined an expedition to Rikuzen Takata to learning more about their residency program, how it is organized and in what ways my Japanese colleagues are using art as a social tool for post-traumatic healing. This is a subject of great interest to me, as I also have experience of art events in the disaster area of Gyumri in Armenia, a city that was devastated by a terrible earthquake in 1988. I have organized international art events and residencies in Gyumri with a similar purpose of exploring how art can be used in locations of trauma.

Since that visit first I could not stop thinking about Rikuzen Takata. The experience of seeing and feeling this wounded city moved me deeply, and I continue to believe that art can be be powerful force in the process of healing. In 2019 I had another opportunity to visit but this time I was lucky enough to be invited for one month fully funded research residency, with Japanese style housing, shared with a Japanese artist Yusoke Komuta. I knew some people there already and it gave me more confidence that there would be a productive outcome. This time I met Fumie Abe, who was managing the residency and assisting us to navigate our way around, introducing other Iwate cities, helping with translation and all our daily needs.

It was an incredible cultural exchange experience for me. I found inspiration in the Iwate landscape and the creativity of traditional Japanese food and cooking, particularly 'nori' and everything that is possible to make with it. I looked at nori as a medium for art. I made an installation using it as well as trying my hand at origami and Japanese visual arts, particularly aquarelle painting on wood, and the 'kanji' system of writing. My research in these phenomena drew my mind back in time to past millennia, when humans started to think about recording events and storytelling, passing information to others and their next generations though cave drawings and carvings that we now know as 'petroglyphs'. I was surprised to find the similarity between the petroglyphs in my country and Asia Minor in general, and the ones found in Japan. I imagined that if an ancient Armenian travelled to Japan and saw these stories on rocks, he would read and understand the meaning without knowing Japanese and vice versa. But now it is impossible for an Armenian to read Japanese writing the first time he sees it, and likewise for a Japanese to read Armenian writing.

I showed works in progress during open studio day, from two projects initiated during the residency. I made sketches of the similarities between petroglyphs from our different parts of the world, I cast them in concrete and developed a proposal to incorporate them into the floor in the community center of Rikuzen Takata, still under construction. I also worked on a video project, a documentary film called Roll Call that I later submitted for a group show in Tokyo called Collection of Recollections.

I have many impressions and considerable research material gathered during my time in Rikuzen Takata that I continue to digest though a number of current projects. I am working on a video narrative about my residency experience in Rikuzen Takata, exploring the concept of the 'selfie', and documenting the life-changing experience of the residency.
My Japanese heart will bring me back to Japan, and I am a creating little Japan in my home country, through hosting my friends from Japan and introducing them to our Armenian community. Good luck with Rikuzen Takata residency, it has a strong and powerful concept, leading social progress and change, helping the wounds to heal.

**ミクルティチ・トノヤン**／ミクルティチのアートの実践は、現在のこの世界の構造に対する反対意見の表明、またそれを変えるための試みである。コンセプチュアル・アートの分野のなかで、アルメニアではAlexander　Melkoyanによってつくられた『ミリタリー・アート』の方向性を追求し、彼の初期の活動の段階では彼の手助けを借りて行われてきた。

**Mkrtich Tonoyan** / Mkrtich's art practice is a disagreement with the nowadays world-structure and an attempt to change it. Conceptual art gave him the chance to talk louder and announce about my ideas and position, coming out from his life experience. In conceptual art he is following "Military Art" direction, which in Armenia was founded by Alexander Melkonyan, and his first steps were done with his help.

Artist 02

# Yusuke Komuta

## 小牟田悠介

## 1000年受け継がれる祈りのかたち。七夕、100の祈り、欲望のかたち。

小牟田悠介／ ヴィジュアルアーティスト［日本］

陸前高田のけんか七夕・動く七夕には1000年以上に渡って受け継がれる祈りのかたちが潜んでいて、それは今も多くの人を魅了しているのではないだろうか。陸残高田の七夕に興味をもち2019年の夏に参加した。その後、陸前高田AIRで30日間滞在した。合わせて5ヶ月間ほどこの地のことを心に留めることで、根源的な表現のあり方を見つめ直す機会となった。

陸前高田には、強い絶望と憤り、現実に対して、健やかな欲望、まっすぐな夢で対抗する大人たちがいた。それぞれの生命力は、一人一人の力を越えて、大きな表現となっている。この期間、気仙地方で出会った全てのことは力強く、人間くさく、魅力的だった。たくさんのものを失ったことで、生み出される想像力の光は強く、遠くまで届いているようだ。まっすぐな欲望が想像力を生み出している。初めてこの地を訪れた時とこれからも変わらない気持ちで向き合うつもりだけれど、そのあまりにも突き抜けた個性達は星のように輝いていて、率直に驚いた。そんな風にどうしたらなれるの？というくらいの光り方。震災から9年を経た今だからこそ知ることができた。この世界はフィクションを越えたドラマが生まれているんだということ。そのことに出会えた喜び。自分の住んでいる街の魅力も知らない自分が、陸前高田の魅力をにわかに語る資格がないことはわかっているつもり、だけれど出会ったからこそ、それが世界のどこだろうとそのことに向き合うことにした。その突き抜けた欲望の先が見たい。

陸前高田には素晴らしい大人たちがいる。その人たちがバチを高らかに、太鼓を鳴らし続けている。なら自分も負けじと響き返さないといけない。対等に響き会えることはできないとしても、まずできることは、その素晴らしい生き方に憧憬の念を持ち、過去を省察しながらも、自分なりの応答をする。まずはトレーニングとして自らも欲望を解放しようじゃないか。と思い立ち、七夕に想いをのせ、自分の願いと欲望を100個、書き連ねることにした。地元の先生のご好意と縁で、陸前高田の高校生にも付き合ってもらい、一人100個ずつ書き出してもらった。それを竹に結えてぶつけ合った。回転してぶつかり合う“願いごと”たちは、時期のずれたこの場所で、何かを立ち上げることができたのかどうか。少なくとも私にとってのこれまでと、これからを繋ぐ新たな探究が始まった。

陸前高田のけんか七夕は、人々の様々な感情が集まり、集積し、ぶつかり合い生まれる祭りだ。独自の抽象的な形態に惹かれてこの祭りに参加した。900年続いているとも言われている。この地方はもともと玉山金山の関係で京都との繋がりが強かったようだ。けんか七夕の原型である「むかし七夕」の特徴的な炎を連想させるとんがったフォルムは、祇園祭の山鉾に由来があるらしい。京都の祇園祭の起源はというと、864年の富士山の噴火や、869年の貞観（じょうがん）地震など、度重なる災厄を払うため、矛を立てた山車を当時の国の数である66基作り、市中を練り歩いたのが始まりだ。祇園祭は令和元年で1150年目となった。1000年以上続く祈りの祭り。そして祇園祭から陸前高田の七夕へと山車の形は伝承され、人々に受け継がれていった。のではないか。山車の形は人々が継承した「祈りのかたち」といえる。

AIRの初めに興味のきっかけとなったのは、2011年の東日本大震災の年の8月7日の一枚の写真。瓦礫のまだ残る中でたった一基を飾り付けて灯りをともして練り歩いた陸前高田の七夕の画像だ。この情景がどうしてこれほど印象深いのか。現代に生きる人々が以前と同じように衝動に駆られ、直面する現実とその中で祭りが出来たという喜びを体一杯で感じている様子を見ると心が揺さぶられる。哀しみと喜びの強い両義性が、“物”と“事”に集結する様は、そういった機能を受け持つ祭りの本質であり、生きていく人の技術として、根源的な表現の力なのだと実感した。感情の集積によって生まれた山車は、アブストラクトな形となって光を放ち、言葉を超えて、時間を超えてメッセージを放っていた。この初めに受けた感覚は、長い歴史が培い、証明しているのだという実感に至った。

**小牟田悠介**/京都造形芸術大学で絵画と造形を学び、東京藝術大学先端芸術表現科を修了。折り紙の展開図を絵画にした《Plane》シリーズや、回転する残像によって立体を作り出し、正逆回転を繰り返す《REVERSE》など、平面と立体の関係を行き来しながら、絵画とインスタレーションを行う現代アーティスト。近年ではミラーを使った空間において鑑賞者の視線をテーマとし、見ることについて考察する作品を展開している。

Artist 03

# Tohokugawa Kanouka?

## 東北画は可能か？

## 私たちの「これまで」と「これから」の景色

東北画は可能か？／ 東北芸術工科大学チュートリアル［山形］

東北画は可能か？の活動が始まり10年もの月日が経ちます。2009年に旗揚げされ、日本のアートシーンの外縁に位置する東北から、日本の、東北のアートシーンを考えるという挑戦状のような形で制作や対話が進められてきました。その直後、2011年に東日本大震災が起こり、私たちが抱えていた「東北」という言葉は、これまでとは違う側面を持つようになりました。こうした文脈の中で、大きな被害を受けた陸前高田でのアートインレジデンス参加が決まったとき、私たちは一体何をカタチ取ればいいのだろうか？という不安をどこかで感じていました。

訪れてみると、10年近く経ってなお終わっていない工事、どうしても目に入る被害の痕跡がある一方で、陸前高田への関心がより強く芽生えて行きました。けんか七夕、気仙大工や気仙言葉などの初めて出会う文化、そして何より交流したさまざまな方々の「何かやってやろう」という強い意思に、東北における陸前高田のレイヤーを見ることができました。

それまで感じていた、「東北」=「震災」のバイアスに絡めとられていたのは、実は私たちだったのかもしれません。レジデンスでの経験は「何をカタチ取るのか」というのが問題なのではなく、「何を見ることができるのか」が重要な視点となっていきました。

そうしてできたのが活動絵巻物の作品でした。共同制作を普段から行う私たちなりの共同絵日記です。旧横田小学校の教室を一周するほどの長い紙に、10人のメンバーがそれぞれ観て、聞いて、感じたことを絵と言葉にして、毎日書き連ねて行きました。

描いていく上で、プログラムコーディネーターの阿部さんに連れて行っていただいた場所やお話していただいたことを毎晩メンバーと遅くまで語り明かしたことは、考えや想いを具体的にするための良いプロセスでした。そして何より楽しかった思い出でもあります。メンバーそれぞれが異なった価値観を持ち、バラバラだからこそ、共有し再構築していくのが「東北画は可能か？」の制作過程でもあります。

しかし、10日間の短い滞在、12月のトークイベントは、ある意味私たち東北画に向けた宿題でもありました。畠山さんからの「東北画とはなんなのか？」という問い、共同制作をすることについて。滞在をしながら陸前高田の風景を見ていると、「東北」という言葉では括ることのできない幾重にもなる固有性を無視することはできませんでした。私たちがこの場所を通して「東北」という大きなイメージへとどう組みなおし描いていくのか？その必要があるのか？改めて襟を正さずにはいられません。

こうした交流や出会いに恵まれて大変勉強になりました。きっかけを与えてくれた皆さんには感謝しきれません。本当にありがとうございました。ですが、今回の滞在は他のアーティストの皆さんのことが羨ましいと感じるほどに、私たちの出会いはごく限られたものでした。もし機会があるのなら、もっと時間をかけて交流をし、私たちが見つけた「陸前高田」と「東北」をより一層深く考え、作品にしていきたいと思っています。そして何より皆さんにまたお会いし、たくさんのお話しできたらなと、心から願っています。

**東北画は可能か？**／2009年に東北芸術工科大学の日本画コース教員三瀬夏之介と洋画コース教員鴻崎正武によって旗揚げされた「東北」におけるアートの在り方を模索するチュートリアル活動。その活動内容は大きく分けて次の3つ。同じサイズとフォーマットで構成される「東北」をテーマとしたメンバーの個人作品群。もうひとつはメンバーで共同制作された、絵画および立体作品。そして展覧会、である。東北画はこれからも、東北的なイメージを、言葉と形にしていくことで、その在り方を探求し続けるだろう。

| | |
|---|---|
| 発行日 | 2020年3月 |
| 発行 | なつかしい未来創造株式会社 |
| 編集責任者 | 日沼禎子、松山隼 |
| 助成 | 平成31年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業 |
| 協力 | 女子美術大学 アートプロデュース表現領域研究室、株式会社長谷川建設 |
| 後援 | 陸前高田市 |
| 協力者（順不同） | 阿部ひかり、阿部史恵、阿部由男、岩手県立陸前高田高校、大船渡カトリック協会、河野和義、佐藤一枝、高田猟友会、田崎飛鳥、田崎實、田崎美代子、特定非営利活動法人パクト、畠山直哉、パン工房母笑、BLISS DESIGN STUDIO（BMLab） |

| | |
|---|---|
| Published on | March, 2020 |
| Published by | Natsukashi-Mirai-Sozo, Co., Ltd. |
| Editing | Teiko Hinuma and Jun Matsuyama |
| Supported by | the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2019 |
| Cooperation | Field of Art Produce and Museum Studies Department of Cross-Disciplinary Art and Design Joshibi University of Art & Design and HASEGAWA CORPORATION |
| In Association with | City of Rikuzentakata |
| Cooperators | Hikari Abe, Fumie Abe, Yoshio Abe,<br>Catholic Ofunato Church,<br><br>Minoru Tazaki, Miyoko Tazaki, Naoko Tanesaka, NPO PACT<br>Takata Ryoyukai, Naoya Hatakeyama, Bakery Gaganiko,<br><br>BLISS DESIGN STUDIO (BMLab) |